

特集 臨床実践を研究につなげる

特集1 「ケアの意味を
見つめる事例研究」に
臨床の現場で取り組む

看護研究においては事例研究の重要性が高まり、本誌でも2013年に「看護学における事例研究法」と題して特集を組んで以来、たびたび取り上げてきました。今回の特集タイトルとなっている「ケアの意味を見つめる事例研究」は、昨年の本誌51巻5号特集として取り上げ、この事例研究を開発された山本則子先生（東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻）にご企画をお願いし、取り組みの詳細を紹介いただきました。

「ケアの意味を見つめる事例研究」では、新たな形の事例研究の確立をめざし、現場からもたらされる実践の知を明らかにするべく、現場の実践者が主体的に研究に取り組み、研究者とともに新たな実践知を創出し、広く共有を図るためのプロセスやさまざまな仕組みが構築されています。現在も、さらなる精練に向けて開発が続けられています。

昨年の特集では、「ケアの意味を見つめる事例研究」の大きなアウトラインをご紹介しました（<http://www.igaku-shoin.co.jp/journalDetail.do?journal=38125>）。今回の特集ではその具体的な成果の1つとして、一施設が取り組んだ一連のプロセスと、現場の看護師が筆頭著者となって執筆した事例研究をご紹介します。

現場は研究の宝庫と言われるように、日々刻々、さまざまな場で生み出される現場の知を掘り上げて研究の成果として形にしていくことは、看護学の発展を後押しする大きな可能性につながると思われます。同時に、現場の看護師の方々にも、自分自身の看護や研究に取り組む自信を与えるのではないかと期待を抱きます。本特集が、そうした契機となれば幸いです。

（『看護研究』編集室）